

# アフリカ子どもの本プロジェクト(JACBOP) 2017 年度活動報告

## 1、概況

アフリカ子どもの本プロジェクトも結成 14 年目を迎えました。毎月定例の運営会では、ドリームライブラリーのことや、お薦め本の選定など、さまざまなことについて話し合っています。ブログやフェイスブックでの発信も続けています。今年度は、タンザニアの絵本作家ジョン・キラカさんをお招きして講演会、ワークショップ、ストーリーテリングの会などを開きました。日本のみなさんに、ジェスチャーや時には歌も入るアフリカのストーリーテリングを楽しんでいただけたことと思います。また、今年度は雑誌「歴史地理教育」（一般社団法人歴史教育者協議会）に会員が交替でアフリカの絵本を毎月紹介する記事を書きました。学校現場には、いわゆる調べ学習用の図書しかご存じない方もおいでなので、絵本も学習に使えるという側面に目を向けていただけたのではないかと思います。

ケニアのドリームライブラリーについては、今年度も図書購入のための費用を送りました。京都大学の松田素二先生と、先生のお仲間のオディンガさんには、ライブラリアンにお給料を届けたり、連絡事項を伝えたりする際に、いつも多大なるご協力をいただいています。

沢田としきさんの絵がついた布バッグとマスキングテープを加えた支援グッズも、引き続き販売中です。

事務局員のいない、ささやかなグループのゆっくりとした歩みですが、今後ともどうぞ見守っていただければ幸いです。

## 2、会員数

2016 年度末の会員数は 109 名、2017 年度末は 115 名となりました。

## 3、2017 年度活動報告(2017.4-2018.3)

### 3-1 運営会の開催

毎月 1 回運営会を持ち、アフリカへの支援、選書や図書展、イベント等の打ち合わせを行いました。

### 3-2 ドリームライブラリー等の支援

#### 1) ケニアのドリームライブラリーについて (写真①)

ケニア西部のエンザロとシャンダにある二つのドリームライブラリー（子ども図書館）を支えることは、私たちのプロジェクトの三つの柱の一つです。現地にしょっちゅう行くことができないため、京都大学の松田素二先生が、研究フィールドにおいでになるついでに見てきてくださったり、先生のお仲間のオディンガさんに連絡係としてご協力をいただいたりしています。

図書館についてはみなさんの会費から、毎月ライブラリアンのピーターさん（エンザロ）に 10000 シリング、アイリーンさん（シャンダ）に 5000 シリング、両方の図書館に新聞購読料として 1860 シリングをお渡ししています。そのほか、新聞販売店が近くにないエンザロについては、新聞配達交通費として 1000 シリングを渡しています。また、ケニアでの連絡係や給料の支払いを担当して下さっているオディンガさんには交通費や払込の手数料として毎月 2000 シリングをお渡ししています。現在のレートだと 1 円が約 0.9 シリングになります。新聞は主にコミュニティの大人のためですが、曜日によっては子ども向けの記事も掲載されています。新聞を読みに来た大人が、子どもたちが本を喜んで見たり読んだりしているのを見て、図書館の重要性に気づいてくれるといいな、という思いもあります。エンザロについては、地元の有力者であるアレゴさんが、新聞を自宅に持って行ってしまい図書館にない、という状態が発生していましたが、今は図書館にちゃんと届いて管理もされているようです。

2004年に設立したエンザロ・ドリームライブラリーは、週に全日5日+半日1日開館しています。2008年に設立したシャンダ・ドリームライブラリーは、週に全日2日+半日2日開館しています。

エンザロの図書館については、壁の内側を白く塗る工事も行いました。シャンダの図書館については、コミュニティの人たちによく見えるように看板をつくる工事もすることになっています。

●2017年1～12月 ドリームライブラリー利用報告（単位：人）

エンザロ・ドリームライブラリー 報告者：ピーター・インブーカ

利用者別数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
幼児	376	363	429	703	606	575	531	628	475	527	616	172	6001
プライマリー生徒	321	426	407	810	558	435	357	574	408	521	419	150	5386
セカンダリー生徒	248	234	231	460	236	268	243	330	291	432	256	102	3331
おとな	186	239	142	319	266	300	229	253	198	314	231	92	2769
合計	1131	1262	1209	2292	1666	1578	1360	1785	1372	1794	1522	516	17487

開館日数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
単位 日	24	24	24	26	27	28	25	26	26	24	27	24	305

シャンダ・ドリームライブラリー 報告者：アイリーン・ナムニュー

利用者別数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
幼児	515	603	510	320	351	502	20	600	127	72	50	110	3780
プライマリー生徒	2006	1960	2520	1902	2005	1920	1112	1130	115	1110	992	952	17724
セカンダリー生徒	200	120	335	400	301	610	102	330	150	120	110	311	3089
おとな	55	20	17	16	18	13	21	300	50	33	45	11	599
合計	2776	2703	3382	2638	2675	3045	1255	2360	442	1335	1197	1384	25192

開館日数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
単位 日	18	16	18	17	18	16	18	18	16	18	18	18	209

2) アフリカへのその他の支援

今年度はありませんでした。今後も要請があった時に、検討して送本し、ホームページに報告を掲載するという形で続けていければと思っています。

3-3 アフリカのことを知らせる活動

1) 講演（写真②）

①杉並区高井戸東小学校

会員のほそえが、4月22日（土）の2時間目に、4年、5年、6年生、約320名にアフリカ子どもの本プロジェクトの活動についてお話ししてきました。

まずはアフリカについての3択クイズをして、みんなに手を上げて参加してもらいました。その後、『エンザロ村のかまど』を紹介し、この絵本からプロジェクトの活動が始まったこと、現在サポートしているエンザロとシャンダのドリームライブラリー訪問時の動画や写真を見てもらいながら、遠いところにも、同じ本を楽しんでいる仲間がいることなど、お話ししました。

正味35分ほどの会でしたが、学校司書の方や先生がたが、事前にアフリカについての絵本を子どもたちに読み聞かせしてくださっていたようで、みんな、興味を持って聞いてくれてうれしかったです。

## ②中野区立図書館 児童書講座

代表のさくまが、10月8日「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本」というテーマで、プロジェクトの活動と、プロジェクトで推薦している児童書について話をしました。図書館のスタッフが、プロジェクトの推薦図書のほとんどを用意してくださっていたので、参加者の方にも手に取って見ていただきました。  
[https://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/event/event\\_201709\\_jidoushokouza.html](https://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/event/event_201709_jidoushokouza.html)

## ③吹田市立中央図書館

代表のさくまが、12月10日大阪府吹田市立中央図書館で、「共感を育てる子どもの本：どうして図書館？ どうして平和？ どうしてアフリカ？」というテーマで講演をし、最初の部分で、二つの図書館のスライドを見せてプロジェクトの活動について話しました。  
<https://mainichi.jp/articles/20171205/ddl/k27/040/386000c>

## 2) ジョン・キラカ氏来日イベント (写真③)

今回の来日は、大阪国際児童文学振興財団の招聘によるもので、キラカ氏は大阪で講演とワークショップ、京都でワークショップや語りの会を開き、その後東京でアフリカ子どもの本プロジェクト主催の講演やイベントを行いました。開催に臨み、プロジェクトから多くの会員がボランティアで参加し、イベントの運営に協力しました。今回の会場用に「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本リスト」を作成し、プロジェクトの紹介チラシと一緒に配布。2日間を通して、新しい会員が5名増えました。以下それぞれのイベントの様子を報告します。

### ◆ジョン・キラカ氏 プロフィール

絵本作家、画家、ストーリーテラー。1966年タンザニア生まれ。幼い頃から地面に絵を描くのが好きで、農業や狩猟、漁業に従事しながら、ヴィレッジ・ミュージアムでティンガティンガ派の画家ピーター・チャウガンガから絵を学び、独自の画風を確立。タンザニアの村々をまわって昔話を集め、タンザニア、ドイツ、スイスなどでストーリーテリングを行う。初めての絵本は『チンパンジーとさかなどろぼう』（若林ひとみ訳 岩波書店）で、2作目の『いちばんのなかよし』（さくまゆみこ訳 アートン）は2005年ボローニャ国際児童図書展ラガッツィ賞ニューホライズン部門を受賞。2017年7月、3冊目の絵本『ごちそうの木』（さくまゆみこ訳 西村書店）が来日に合わせ、出版された。

### ●「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本展」

会場：青山学院女子短期大学 学食（渋谷区渋谷4丁目）

日時：8月4日（土） 10:00～16:00

広い学食の中をアフリカの布などで区切り、プロジェクトの推薦図書の中から絵本を中心に60冊程度を展示。青山学院のオープンキャンパスの日で、校内には多くの学生や親子連れが見られましたが、奥まった場所のため比較的静かな環境の中で、展示会の参加者は落ち着いて絵本を見たり、子どもたちはティンガティンガ風の動物のぬりえを楽しんでいたりしました。午前と午後に1回ずつプロジェクトのスタッフが、キラカさんの絵本の読み聞かせとアフリカの絵本についてミニレクチャーを行い、ブックトークやプロジェクトの説明をしました。

### ●子どものためのワークショップ

会場：青山学院女子短期大学 図工室

日時：8月4日（土） 14:00～16:00

通訳：井上真悠子さん

共催：JBBY（日本国際児童図書評議会）、AJF アフリカンキッズクラブ

AJF アフリカンキッズクラブ（アフリカのルーツを持つ子どもたちやアフリカ人のパートナーを持つお母さんたちがアフリカの文化に触れる活動をしている）を中心に、他にも広く呼び掛け、21名の子どもたちが参加しました。

最初にキラカさんがスワヒリ語で『ごちそうの木』（西村書店）のストーリーテリングをし、その後、ティ

ンガティンガの技法を実際に描いて説明してくれました。子どもたちはキラカさんにアドバイスをもらったり、ボランティアにサポートしてもらったりして、思い思いに動物の絵を描きました。最後は、描いた絵をみんなの前で披露して、キラカさんよりお手製のステッカーをもらいました。

ワークショップの様子は、雑誌『月刊イラストレーション』『クーヨン』等で、後日記事になりました。朝日新聞デジタル版（11月21日付）でも、当会の紹介とともにとりあげられました。

[http://www.asahi.com/and\\_travel/articles/SDI2017111674771.html?iref=andt\\_pc\\_top\\_mainphoto](http://www.asahi.com/and_travel/articles/SDI2017111674771.html?iref=andt_pc_top_mainphoto)

### ●講演会「アフリカの豊かな語りと絵本づくり」

会場：東京ウィメンズプラザ ホール（渋谷区神宮前5丁目）

日時：8月5日（日） 18:00～20:00

聞き手：さくまゆみこ 通訳：岩井雪野氏、フランシス・マゲジ氏

共催：JBBY（日本国際児童図書評議会）

青山通りを挟んで青学の近くにある講演会の会場に前日の展示物を運び、ホールの後方に展覧会場を設置しました。大阪から届いたキラカさんの原画も3点展示。14:00から17:00まで展覧会を実施し、講演会参加者以外の来場者もあって賑わいました。受付では、キラカ氏の絵本やプロジェクト関連の本の販売も行い、講演後サイン会も行われました。

講演会は100名余の参加者で盛会となりました。最初に佐藤力氏による東アフリカ音楽の演奏、キラカさんによる身振り手振りたっぷりのスワヒリ語のストーリーテリング、その後会場からの質問も含め、キラカ氏の豊かな語りや絵本づくりについて対話式で進行了しました。

#### <アンケートから>

- ・タンザニアの生活の様子がわかり、キラカさんの絵本をもっと楽しめそうです。
- ・言葉がわからなくても伝わるお話がすてきでした。
- ・2010年～2012年タンザニアにいました。タンザニアに行った外国人がタンザニアのことを紹介することは多いですが、タンザニア人自身がタンザニアのことを伝えるのはとても素晴らしいことだと思いました。アフリカに関する児童書がこんなにたくさんあり、きちんとリストアップされているのも知りませんでした。少しずつ読んでみたいと思いました。
- ・絵本の絵に描かれたものについての説明も大変興味深いものでした。スワヒリ語はわかりませんが響きが楽しかったです。
- ・アフリカの伝統にも現在にも触れることができ、少し視野が広がった気がしました。発見がたくさんあって、楽しく有意義な2時間でした。
- ・構成が素晴らしい講演会でとても楽しかったです。絵本の中の文化紹介や楽器の演奏など、子ども向けの多文化紹介のイベントなどでも、こんな構成はとても参考になりました。
- ・様々な動物が様々な装いで、頭つきあわせて話し合うようなシーンがいつもあるように思いましたが、それは共生のあるべき姿をととてもシンプルに見せてくれているように感じました。目も心も喜ぶ絵でした
- ・色彩の豊かさにひかれてやってきました。キラカさんの身体全体での語りを前に、きっとここに子どもたちがいたら、物語の世界にぐっと引き込まれているだろうと、その姿が見えるようでした。

### 3)「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本展」(写真④)

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

会期：2017年12月4日～22日

学生さんたちが企画・運営したアフリカンウィークスの一環として、会場の一部で、アフリカ子どもの本プロジェクトの絵本セットを展示していただきました。会期内には読み聞かせの会も開かれました。

### 3-4 「アフリカに関する児童書 おすすめリスト」の選書

ホームページの「おすすめの本」コーナー、「おすすめの本リストPDF」には、2017年7月までに選んだ本が入っています。

今後もホームページの「おすすめの本」コーナーに、新しい推薦本の書誌を追加する作業をすすめます。「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本展」の展示本は、新しい本を中心に 120 冊程度に調整していますが、ホームページにはこれまで選んだ推薦本全点を掲載しています。

「歴史地理教育」の 2017 年 4 月号から「絵本で知ろう！アフリカの国」というタイトルで、絵本紹介コラムを連載しました（2018 年 3 月号まで）。会員で手分けして書いています。プロジェクトの HP に半年遅れで、毎月アップしていますので、ご覧ください。

●2017 年度、選書会は 7 回開催。

20 冊検討し、4 冊リストに入れることになりました。

4 月 シリーズ検討

5 月 7 冊検討

6 月 シリーズ検討

「サバンナを生きる」シリーズ（徳間書店）のうち、『シマウマのこども』（ガブリエラ・シュテーブラー文、ないとうふみこ訳）はリストに入れて紹介。

（昨年度、同シリーズの『ゾウのこども』『ライオンのこども』はリストに入れた）

10 月 8 冊検討

『ぼくの村がゾウに襲われるわけ：野生動物と共存するってどんなこと？』（岩井雪乃著、合同出版）、『ごちそうの木』（ジョン・キラカ作、さくまゆみこ訳、西村書店）をリストに入れて紹介。

11 月 3 冊検討

1 月 1 冊検討

3 月 1 冊検討

『アフリカの民話集 しあわせのなる木』（島岡由美子文、ヤフィドゥ・A・マカカと 8 人のティンガティンガ・アーティストたち絵、未来社）をリストに入れて紹介。

アフリカ関連の本は色々出ていますが、大人向けの本が多く、会のリストに入れる本があまり刊行されていないように思いました。

子ども向けに刊行されている本であっても、編集の仕方が不十分で、もう少し表現や見せ方に工夫があれば紹介したくなるのに……と思われるものが散見され、残念でした。

●2018 年度に向けて

選書会に出席できる人が限られて来ているので、来年度も地方の会員をはじめ、多くの方に本を読んでもらい、意見をメール等で募り、選書に反映させたいと思います。

3-5 支援グッズの製作・販売（写真⑤）

これまでに作ったトートバッグ、マスキングテープ、Tシャツなどを、8 月のキラカさんの東京のイベントで販売しました。年会費の納入の際、ぜひ合わせてご購入頂き、ご支援ください。

新たに絵はがきをつくることを現在検討中です。

3-6 ホームページの更新

ホームページ <http://africa-kodomo.com/>では、ブログページで定例会の様子や日常のご報告を、お知らせページで展示や会員関連の講演情報などもお伝えしますのでご覧ください。

他にインターネットでは、メールによるプロジェクト・ニュース配信と、フェイスブック（<https://www.facebook.com/africachildrenbooks>）を利用した情報発信を実施しています。

フェイスブックページでは、2018 年 3 月 4 日現在、「いいね！」をクリックして下さった方は 381 名。ホームページとのリンクを含め、今後もホームページとフェイスブックの内容を充実していきます。

3-7 「プロジェクト・ニュース JACBOP NEWS」の発信

電子メールを使って、運営会の報告、新会員の紹介、ケニアのドリームライブラリーの様子その他を会員向けに随時発信しました。

4、2017年度決算報告(2017.4.1～2018.3.31) (省略)

5、2018年度予算(2018.4.1～2019.3.31) (省略)

---



## ケニアの子どもと本

さくまゆみこ

私は、「アフリカ子どもの本プロジェクト」というNGOで活動もしている。この小さなグループは、西ケニアの二か所に子ども図書館（ドリームライブラリー）をつくってそれを支えたり、日本で出版されているアフリカ関係の児童書をすべて読んで推薦リストをつくったり、それを活用して日本の子どもたちにアフリカの文化やアフリカの子どもたちのことを伝えることを目的に活動している（ウェブサイトは、<http://africa-kodomo.com>）。

今回は私たちが子ども図書館を設立したケニアの子どもと本について、書いてみたい。

ケニアでも、たとえば首都のナイロビには高層ビルや広い公園や繁華街が

あり、交通量も多く通勤時には渋滞も起こるなど、世界中の多くの大都市と同じ風景や雰囲気を持っている。しかし子ども図書館があるエンザロとシヤンダは、ケニアの中でも貧しい地域であり、都市部とはずいぶん違う。子どもたちが通う学校も、都市部だと校舎や設備も日本の学校とそう違わないが、地方の貧しい地域では、校舎も日干しレンガでできており、床は土を固めただけで、窓にはガラスがなく、電気も水道も引けていない。教科書も本来は生徒全員に貸与されるはずだが、エンザロやシヤンダでは、四、五人に一人にしか渡っていない。したがって、そうした地域では、教科書以外の子どもの本など見たこともない子どもたちが

大勢存在する。

二〇〇四年にシヤンダの図書館をオープンした時、日本から持参したり現地で購入したりした本を書棚に並べる役を子どもたちにやってもらったのだが、子どもたちは、背表紙を壁側に向け、横に倒して書棚に本を積んだ。図書館に本が並んでいるところは見たことがなかったのだ。

アフリカ大陸には五〇以上の国があり、子どもの本に関しては、ナイジェリアや南アフリカなど熱心に自国で出版している国もあれば、そこまでの余裕がない国もある。ケニアは、一九六三年に独立して以来、子どもの本の出版社もいくつかできて、英語とスワヒリ語での出版が続けてきた。その後一時



は教科書以外の出版が停滞した時期もあったが、今はまた出版が盛んになってきている。

ここで、言語の問題に触れておくと、ケニアには六〇〜七〇以上の言語が存在すると言われている。そのため、国語はスワヒリ語、公用語は英語と定められ、小学校段階では低学年ではスワヒリ語（大多数の子どもにとって第二言語）、中学年からは英語（大多数の子どもにとって第三言語）を使って授業が行われる。したがって、出版される子どもの本も、スワヒリ語と英語のものが圧倒的に多い。

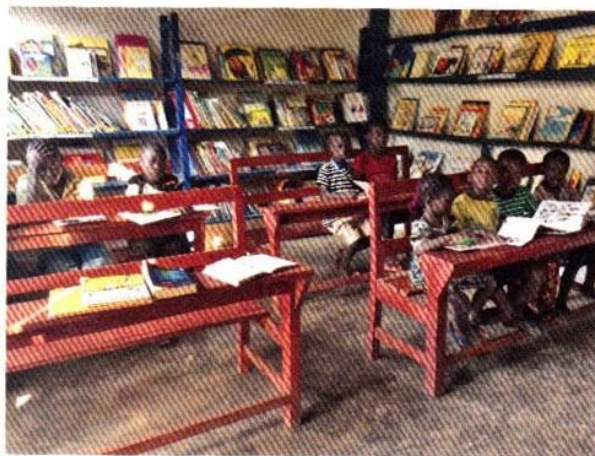
それでは、どんな内容の子どもの本が出版されているのだろうか？ どのアフリカの国でも、最初に出版される子どもの本は、昔話が多い。これは、一つには昔話の中に文化のルーツがあるとみなされているからだし、もう一つには昔話の構造そのものが子どもに親しみやすいからだと思う。しかし、そのほかに、もう一つ大きな理由がある。サハラ以南の多くのアフリカ諸国では、〈書く・読む〉の文化より、〈話す・聞く〉の文化のほうが盛んであっ

た。子どもに物語を伝えるとき、現代の日本にいる私たちは、つい「本」を思い浮かべるが、アフリカの人々は「ストーリーテリング」を思い浮かべる。民話や昔話は、それほど子どもにも身近なものとして日常の暮らしの中に存在していたのだ。

昔話の次に多いのは、学校物語や冒険物語だろう。学校や日常生活の中のさまざまな事件や冒険の物語である。

アフリカの多くの作家たちは、子どもの本を啓蒙や教育の一環として考えている。かつてはストーリーテリングを通して伝えようとしていたことを、今は本を通して伝えようとしていると言ってもいいかもしれない。たとえば共同体の価値観、民族の歴史、衛生面や倫理面での注意などが、メッセージとして本の中にこめられている場合も多い。

ケニアで出版される児童書の形態はほとんどがペーパーバックである。図書館の書棚に立てて並べることが難しい



エンザロ・ドリームライブラリー。本の表紙を見せるようにして何冊かまとめて並べている。

いので、エンザロ・ドリームライブラリーのライブラリアンであるピーター・インブーカ氏は、表紙を見せるように何冊かまとめて書棚においている。

児童書の出版という点ではまだこれからの部分も多いが、子どもたちは本があれば熱心に読む。語りの伝統を消さずに文字の文化をどう発展させていくかが、これからの課題かもしれない。